

烏弋山離とアレクサンドリア(2)  
—歌戈魚虞模古読論争と「烏」の音価—

吉池孝一 中村雅之

歌戈魚虞模古読論争

吉池：今回は「烏」が「Alexandreia」の語頭の/a/に相当することについて議論したいと思います。つまり、現代北京音で[u]であり、中古音で[o]ないし[uo]と再構される「烏」の発音が漢代に[a]（ないし[ã]）であったのかどうかということですが。

中村：三年ほど前でしたか、歌戈魚虞模古読論争のことを話し合いましたね<sup>1</sup>。その際に後漢の梵漢対音などが出てきました。確か、吉池さんが昔、慶谷先生の授業で汪榮宝の「歌戈魚虞模古読考」を読んだのでしたね。

吉池：はい。歌戈魚虞模韻の古い発音については今から100年近く前に論争がおきるのでありますが、その論争の発端となったのが、1923年の汪榮宝「歌戈魚虞模古読考」<sup>2</sup>という論文です。汪氏によれば、当時の発音では、麻韻はa、歌戈韻はo、魚虞模韻はuまたはüでした。しかし、上古音の枠組みをみると、麻韻は歌戈魚虞模韻と一類になっている。それで、もしも歌戈魚虞模韻の音価が上古音でもuまたはüであったとするならば、上古音はaのない体系となってしまいます。そこで、汪氏は、日本漢字音やSanskritの音訳漢字を論拠として、歌戈韻の音価は唐宋以前ではaであり、魚虞模韻の音価も魏晋以前ではaであった、とするものです<sup>3</sup>。

中村：「魚虞模韻の音価も魏晋以前ではaであった」という部分が今回の議論にかかわる訳ですね。おそらく上古音の音価について対音資料を利用して再構を試みたのは中国では最初のもので、2016年の対談でも少し話題になりましたが、日本では大矢透の『周代古音考』が1914年に出ていて、そこでもすでに後漢の梵漢対音や魏志倭人伝を利用しています。ただし、大矢氏が魚虞模韻を含む韻部（大矢氏の「固部」）に対して推定した上古音の音価は[uo]でした。

その後、有坂秀世『上代音韻攷』（1933年頃執筆）が上の大矢透や汪榮宝を参考にしつつ、音価を周代[a] > 漢代[o]としますが、この書の公刊は死後の1955年です。そうこうするうちにカールグレンの上古音研究がまとまり、1940年のGrammata Sericaで上古音の音価

<sup>1</sup> 吉池孝一・中村雅之(2016)「慶谷壽信先生の学問などについて(5)」『KOTONOHA』第166号(2016年9月)。

<sup>2</sup> 『國學季刊』第1巻第2期。

<sup>3</sup> 「依余研究之結果，則唐宋以上，凡歌戈韻之字皆讀a音，不讀o音；魏晋以上，凡魚虞模韻之字亦皆讀a音，不讀u音或ü音也」(241頁)。

を網羅的に示すこととなります。しかし、彼は汪榮宝に始まる歌戈魚虞模古読論争の成果を取り入れることはなく、魚虞模には [o] などの円唇母音を想定しました。

吉池：流れは大体わかりました。問題となるのは魚虞模韻の周代の音価が [a] でよいのか、そして「烏弋山離」という音訳がなされた漢代の音価はどうかという二点ですね。

中村：そうですね。先人達には 100 年経ってもまだ同じことをやっているのか、と叱られそうですが、出発点を確認するところから始めましょう。当面、問題になるのは周代の音価ですが、これは『詩経』の韻部を吟味してのことでしょうね。

吉池：それでは手順として、まず歌戈魚虞模の『詩経』における押韻状況を確認することから始めなければなりません。

### 段玉裁『六書音韻表』

吉池：『詩経』の押韻の状況を簡単に確認できるものという去何がいいでしょうね。

中村：段玉裁の『六書音韻表』はどうでしょう。段玉裁は韻部を 17 に分類しましたが、その韻部ごとに『詩経』の韻字を示して、中古の韻との対応も分かるようにしていますから、当面の役には立つかと思えます。藤堂明保氏の概説<sup>4</sup>を参照すれば、その後の研究者の韻部の分類も分かります。段玉裁の第五部が中古音の魚虞模韻に対応する部で、第十七部が歌戈麻韻に対応するようです。

吉池：段玉裁の第五部の冒頭を見ると「砮瘡痛吁（周南卷耳四章）」【( ) は割注】とありますね。

中村：国風・周南の卷耳の第四章（四番目のまとまり）の韻字が砮瘡痛吁ということです。詩経本文については『新釈漢文大系 詩経』（明治書院、1997 年）が便利ですので、これに拠ることにしましょう。

吉池：第四章を抜き出して韻字に中古音の情報と、目安として日本漢字音の呉音・漢音<sup>5</sup>を付すと次のようになります。

砮彼砮（清魚平ソ・ショ）矣　我馬瘡（定模平ズ・ト）矣  
我僕痛（滂模平フ・ホ）矣　云何吁（曉虞平ウ・ウ）矣

<sup>4</sup> 藤堂明保(1980)『中国語音韻論 —その歴史的研究—』光生館。および藤堂明保(1967)「上古漢語の音韻」『中国文化叢書 1 言語』大修館。

<sup>5</sup> 藤堂明保(1978)『学研漢和大辞典』学習研究社による。

『六書音韻表』の「𠄎」は『新釈漢文大系 詩経』では「𠄎」になっています。この第四章では中古の魚虞模韻が押韻していますね。ところで、国風というと各地の歌を収録したのですが、方言が反映することはないのでしょうか。

中村：もちろん部分的にはあるでしょう。しかし、有坂氏の言うようにおおむね雅音が用いられているという前提に立たないと作業が進みませんので、方言の問題は後回しということにしましょう。

吉池：第五部は段玉裁によれば、『切韻』の魚虞模韻（およびその上去声）と入声の葉鐸韻が含まれるということですが、実際には麻韻の韻字もかなり多いですね。例えば、「家帑圖乎（常棣八章）」という部分がありますが、『新釈漢文大系 詩経』から「小雅・常棣」の第八章を抜き出して中古音の情報を加えると次のようになり、麻韻の「家」が模韻の字と押韻しています。

宜爾室家（見麻平ケ・カ） 樂爾妻帑（泥模平ヌ・ド）  
是究是圖（定模平ズ・ト） 亶其然乎（曉模平ゴ・コ）

中村：麻韻の「家」は中古音で [ka]、模韻は中古音で [-o] とされていますが、それが詩経では押韻しているのですね。『六書音韻表』では「家」の右側に点が打ってあります。点といっても白抜きの涙マークのような形ですが。麻韻の字には全部この点が打たれていまずから、魚虞模韻と葉鐸韻のほかに臨時に第五部に属するもの、つまり麻韻のようなものについては韻字にいちいち涙マークを付けているようです。麻韻は第十七部にもあって、そちらの方には切韻の歌戈麻韻を含む旨が明記されていますから、段玉裁はこちらを麻韻の本拠地と考えたこととなります。第五部の麻韻と第十七部の麻韻の関係については、いずれ検討することとして、ここではウやオが、エやアという母音と押韻していることが確認できれば良いということにしましょう。問題は押韻が可能であった詩経当時の音価がどのようなものであったかということです。

### 諸家の推定音

吉池：いま試みに、カールグレンの再構音を見てみましょうか。Grammata Serica によると、次のようになっています。

上古音		中古音
固 <i>ko</i>	→	暮韻去 <i>kuo</i>
家 <i>kā</i> [kɑ]	→	麻韻平 <i>ka</i> [ka]

「家」の母音が ɔ > a と変化するのはどうなのでしょうね。

中村：それが問題ですね。後舌母音が自然に前舌母音に変わるとは思えません。

吉池：カールグレン以外の研究者は歌戈魚虞模韻に相当する上古音の音価をどのように設定しているのでしょうか。最近の研究はのちに触れることとして、旧来の上古音研究でどうであったのでしょうか。

中村：上にも挙げた「固」と「家」の各家の推定音価をまとめると次のようになります<sup>6</sup>。

カールグレン	固 ko	家 kǎ [kɔ]
董同龢	固 kâg	家 kǎg
藤堂明保	固 kag [kag]	家 kǎg [kag]
李方桂	固 kag	家 krag
王力	固 ka	家 kea

吉池：董同龢以降は主母音に [ɑ] ないし [a] を想定していますね。これは汪榮宝らの歌戈魚虞模古読論争を踏まえてのことでしょうか。そして韻尾に [-g] が付いています。

中村：魚部（段玉裁の第五部）の韻尾 [-g] については、歌部（段玉裁の第十七部）を [-r] とすることとも密接な関係があり、問題がやや複雑です。今は主母音だけに目を向けておきましょう。

### 後漢～魏晉の対音資料

中村：汪榮宝が用いた対音資料は唐代の著作からのものも含んでいて扱いづらいので、ここでは長田夏樹氏<sup>7</sup>が提示した2-4世紀の対音例のいくつかを挙げることにします。

「烏 a」 烏卑次：avīci 【安世高訳『仏説十八泥犁經』(2世紀)】

「奴 na」 匈奴書：Hūnālīpi 【竺法護訳『普曜經』(308年)】(同じ經典の新訳である地婆訶羅(ジヴァカーラ)訳『方廣大莊嚴經』(7世紀)では護那書と訳す)

奴国 【魏志倭人伝=陳寿・三国志・魏書東夷伝倭人(3世紀末)】(一般に大和

<sup>6</sup> カールグレン：Karlgrén, B. (1957) *Grammata Serica Recensa*. Stockholm: The Museum of Far Eastern Antiquities. 1987年のリプリント版による。初版は *Grammata Serica*. 1940。董同龢(1944)『上古音韻表稿』台聯國風出版社。第三版 1975年による。藤堂明保(1978)『学研 漢和大事典』学習研究社。李方桂(1980)『上古音研究』商務印書館。第2次印刷 1982年による。王力(1980)『詩經韻讀』上海古籍出版社。『王力文集 第六卷』(山東教育出版社, 1986年)所収による。

<sup>7</sup> 長田夏樹(1962)「魏志倭人伝訳音の音価について——上古中国語音韻体系との関連において——」(『長田夏樹論述集(下)』所収, ナカニシヤ出版, 2001年)。長田夏樹(2010)『新稿 邪馬台国の言語—弥生語復元』(学生社)。

時代の儼具（なのあがた）に比定される。

「盧 ra/la」 居盧倅略：kālāsūtra 【安世高訳『仏説十八泥犁經』(2世紀)】

末盧 (=松浦) 【魏志倭人伝 (3世紀末)】

斯盧 (=新羅) 【陳寿・三国志・魏書東夷伝韓 (3世紀末)】

厳密にはいろいろと確認すべきことが多いのですが、模韻の字を a にあてるという傾向は見取れます。

吉池：確認すべきこととは何ですか？

中村：例えば、魏志倭人伝の表記はいつ誰が（倭人が？漢人が？）作ったものなのか、あるいは漢訳仏典の訳者や時代は信頼できるのか、などなど慎重を期すためには十分な検討が必要かも知れません。

吉池：そういえば、橋本貴子氏が漢訳仏典を対音資料として扱う際の問題を論じていたように記憶しています。

中村：上の長田夏樹(1962)が例として挙げた安世高訳『仏説十八泥犁經』についても、橋本氏が書評の中で次のように述べています<sup>8</sup>。

中でも注目を集めるのは、やはり後漢～魏晋期における模・魚韻の音価を /a/ とする説であろう。ここで模・魚韻 /a/ 説について論評を加えることは難しいが、論拠の一つとされた『仏説十八泥犁經』の問題のみ指摘しておく。この漢訳仏典は宇井伯寿『訳経史研究』（岩波書店，1971年）446頁が安世高に仮託された訳経の一つとして取り上げているように、安世高訳でない可能性がある。また、一般の安世高訳や同時期の支婁迦讖訳において模韻字が基本的にインド語の o に対応することから見ても（Coblin, W. S., *A Handbook of Eastern Han Sound Glosses*, The Chinese University Press, 1983, 103頁）、『仏説十八泥犁經』の音訳は特異であるため、この漢訳仏典を後漢～魏晋期の言語資料として扱えるかどうかは検討を要する。

吉池：支婁迦讖訳などの信頼できる対音資料において魚虞模韻が後漢には [ɔ] のような音であったとした場合、その出自はともかくとして、後漢～魏晋期に魚虞模韻を [a] とする資料があることもまた確かですから、これをどのように考えるかが問題になります。

中村：そうですね。一方では模韻の主母音が後漢に [ɔ] であったと考えられる資料があり、

---

<sup>8</sup> 長田夏樹(1962)「魏志倭人伝訳音の音価について」の紹介と書評（『長田夏樹先生追悼集』所収，好文出版，2011年）。

他方では、[a] と見なし得る魏晉の資料がある。後者の資料を出自が曖昧であるという理由で切り捨てるのは簡単ですが、その出自に関わらず後漢以降の資料においてなぜ [a] に模韻をあてるのかという点は説明を要します。[ɔ] > [a] という変化を想定するのは、中古音の [o] (ないし [uo]) を考慮するとほぼ不可能です。仮に魏晉の音訳が実は前漢以前の音訳に基づくとということになれば辻褄は合いますが、広範囲にわたる資料をすべて前漢以前に帰するのはかなり苦しい説明になります。特に上で安世高に仮託された訳経とされた『仏説十八泥犁經』が前漢に作られたと主張するには、訳経史を書き換えるほどの勇気がいります。

吉池：なかなか難題ですね。周代の推定音については魚虞模韻の主母音を [a] とする点は董同龢以降の諸家の一致するところですが。問題は漢代の音価ですが、[a] であったのか、それとも [ɔ] であったのか。

#### 漢代における魚虞模韻の主母音

中村：長田氏が挙げたような魏晉の音訳例を信じれば漢代も当然も [a] であったということになりますが、Coblin が取り上げた後漢の仏典音訳で次のように o 類の母音にあてられているのが反証になっています。なお Coblin によると、安世高、支婁迦讖、康孟詳は西域の訳経僧で、洛陽において訳経に従事したということですから、洛陽音を反映しているとして良いのでしょうか。

安世高

Skt. *krakucchandha* 拘(平:虞)留

支婁迦讖

Skt. *subhūti* 須(平:虞)菩(平:模)提、Skt. *bodhisattva* 菩(平:模)薩、Skt. *kauśika* 拘(平:虞)翼、Skt. *mahākauṣṭhila*; BHS *maha-koṣṭhila* 摩訶拘(平:虞)私、Skt. *asura* 阿須(平:虞)倫、Skt. *upāyakausālyā* 漚(和+ハ)拘(平:虞)舍羅、Skt. *sudassa* 須(平:虞)釐、Skt. *sudarśana*: cf. P. *sudassi* 須(平:虞)釐祇耨、Skt. *sudarśana* 須(平:虞)陀施尼、Skt. *sumeru* 須(平:虞)彌、Skt. *sugandhika* 須(平:虞)捷提、Skt. *gautamapati* 俱(去:遇)譚滑提、Skt. *pūrvavideha* 弗于(平:虞)逮、Skt. *godānīya* 俱(去:遇)耶匿、Skt. *asura* 阿須(平:虞)倫、Skt. *susamprasthita* 須(平:虞)深、Skt. *mahāsusārthavāha* 摩訶須(平:虞)薩和、Skt. *sumati* 須(平:虞)摩提、Skt. *sumanā* 須(平:虞)門、Skt. *sudatta* 須(平:虞)達、Skt. *yojana* 踰(平:虞)旬、Skt. *koṭi* 拘(平:虞)利、Skt. *mahākauṣṭhila* 摩訶拘(平:虞)絺、Skt. *upāyakausālyā* 漚和拘(平:虞)舍羅、Skt. *pratibhānakūṭa* 波坻槃拘(平:虞)利、Skt. *kusuma* 拘(平:虞)束、Skt. *kusuma* 拘(平:虞)遯摩、Skt. *dīpaṃkara* 提怨(去:御)竭

康孟詳

Skt. nyagrodha; cf. P. nigrodha 尼拘(平:虞)陀、Skt. suprabuddha 須(平:虞)波佛、Skt. anomiya cf. P. anomā 阿奴(平:模)摩、Skt. kauṇḍinya; cf. P. koṇḍāṃṇa 拘(平:虞)憐、Skt. mahānāmakoliya 摩南拘(平:虞)利、Skt. kauśāmbī 拘(平:虞)耶尼、Skt. kolita 拘(平:虞)律陀、Skt. nyagrodha; cf. P. nigrodha 尼拘(平:虞)類、Skt. kauśāmbī 拘(平:虞) (藍=) 鹽尼、Skt. ghoṣila 瞿(平:虞)師羅

以上をまとめると次のようになります。

安世高

? ku 拘(平:虞)←Skt. krakucchandha 拘(平:虞)留

支婁迦讖

su 須(平:虞)

kau, ko, ku, kū: 拘(平:虞)

gau, go 俱(去:遇)

va 于(平:虞)

yo 踰(平:虞)

? pa 恕(去:御)←Skt. dīpaṃkara 提恕(去:御)竭

bhū, bo 菩(平:模)

康孟詳

su 須(平:虞)

kau, gro, ko 拘(平:虞)

gho 瞿(平:虞)

no 奴(平:模)

吉池：安世高の 1 例と支婁迦讖の「pa 恕(去:御)」については不確かな部分があるのでとりあえず除いておきましょう。支婁迦讖と康孟詳の虞韻、遇韻に「au」がでてくるのが気になります。同一の漢字で、ko, ku, kū:, go, gro, ko などの円唇母音が想定されるサンスクリットを表記しているのが、au も原音では円唇の [ɔ] のような母音であったのかもしれませんが。そうしますと、後漢の洛陽では、虞韻、遇韻、模韻の母音はおおむね [ɔ] に類するものであったと言えそうです。もともと、va 于(平:虞)には [a] が想定されますが、この例だけでは何とも言えません。

中村：Coblin によると後漢の仏典訳音では魚虞模韻の主母音は o 類の円唇母音であり、長田夏樹氏が利用した魏晋の対音資料では a 類の母音にあてているものが多いということです。他の資料ではどうかということが問題になりますが、森博達氏が漢代の韻文の状況を勘案して、魚虞模韻の主母音を前漢 a>後漢 o としていたように記憶しています。

吉池：森博達(1985)ですね<sup>9</sup>。そこでは羅常培・周祖謨両氏の韻部研究<sup>10</sup>や邵榮芬氏による修正案<sup>11</sup>に拠りつつ、全体として韻部の分合については前漢までは穏やかであるが、前漢から後漢への変遷が顕著であるとしています。そして前漢では魚部と通押していた麻韻が後漢では魚部から離れて歌部に近づくことについて、「この変動は、〔魚〕部の主母音が前漢から後漢にかけて a 類から離れ、o 類に近づいたことを物語っている」(182 頁)と結論づけています。

中村：つまり、漢代の文人たちの押韻例の分析では魚部の主母音を前漢 [a] > 後漢 [ɔ] と考えるのが合理的だということですね。これは Coblin の研究とも一致しています。ここで問題は振り出しに戻るのですが、長田氏が示したような 2-4 世紀の対音資料で模韻字をサンスクリットや日本語など周辺言語の /a/ に対応させていることをどう解釈すべきなのでしょう。

吉池：いくつかの可能性があると思います。一つは、後漢以降、魚虞模韻はすでに [a] ではなく [ɔ] であったけれども、前漢以前の伝統的な音訳法にしたがって魚虞模韻字を周辺言語の /a/ にあてたというもの。しかし、実際の発音とは異なる古い音が音訳のみに伝統として残っていたとするには、その証明となる材料が必要です。それよりはもう一つの可能性として、前漢と後漢では主要方言が異なっていたと考える方が合理的なのではないかと思えます。

中村：具体的にはどういうことですか。

吉池：前漢の首都は長安です。長安周辺は周代から長く都が置かれた伝統ある地域ですから、前漢の文人たちの多くは長安の言語を標準としたと推定できます。一方、後漢では洛陽に都を置きました。東周の名目上の都であった洛陽ですが、後漢以降は政治文化の実質的な中心になった訳ですから、後漢の文人たちは洛陽の言語を標準と見なす者が多かったでしょう。しかし、長安の言語の影響力は後漢になっても完全には衰えておらず、長安音に基づく対音資料も多く存在することになったという訳です。前漢と後漢の長安一帯と洛陽一帯における魚虞模韻の主母音の音価を示すと次のようになるのではないのでしょうか。→は字音自体の“変化”ではなく“交代”と考えます。もともと、前漢洛陽一帯の音価は想像によるものです。前漢と後漢の洛陽にそれほど大きな変化があったとは思えないとい

<sup>9</sup> 森博達(1985)「『倭人伝』の地名と人名」(森浩一編『日本の古代 第1巻 倭人の登場』中央公論社)。

<sup>10</sup> 羅常培・周祖謨(1958)『漢魏晋南北朝韻部演變研究(第一分冊)』(科学出版社)。

<sup>11</sup> 邵榮芬(1982)「古韻魚侯兩部在前漢時期的分合」(『邵榮芬音韻學論集』首都師範大學出版社, 1997年。もと『中國語言學報』1982:1)。



う程度の推測です。

	前漢	後漢
保守的	長安（首都） 一帯 [a]	長安一帯 [a]
革新的	洛陽一帯 ([ɔ])	洛陽（首都） 一帯 [ɔ]

魚虞模韻の主母音の音価

中村：それは面白い考えですね。その点に関連して、森博達(1985)には興味深い指摘があります。後漢になっても魚部と歌部（麻韻）が押韻する例があるけれども、「その合韻例の多くは、班固など一部の保守的な大家の詩文に見られる」（182頁）ということです。そして、班固は『後漢書』「班彪伝」によれば扶風安陵の人、つまり現在の咸陽の出身ですから、まさに長安一帯の言語の話し手であったと考えられます。その班固が麻韻字と魚虞模韻字を通押させていることから、班固の言語では魚虞模韻の主母音がまだ [a] であったと見なすのが妥当です。

吉池：つまり、漢代の魚虞模韻の主母音は長安では [a]、洛陽では [ɔ] であったと考えれば、各種の対音資料も押韻の状況も説明可能だということですね。後漢から魏晋の時期の資料が二類に分かれるのは拠った方言によるものであると。

中村：ここで今回の主題である「烏弋山離」について考えてみましょうか。一字目の「烏」が「Alexandria」の「A」にあたっているのは「烏」を [a] と発音していた長安方言に拠ったものと推定できます。

吉池：前述の邵栄芬氏は「烏弋山離」を前漢の音訳としています。これは恐らくこの音訳が前漢に西域を訪れた張騫等のもたらしたものと見なしてのことでしょう。その可能性は高いと思われますが、同じく西域の事情に詳しく後漢の班超等がもたらしたと考えることも可能です。

中村：実は張騫も班超も長安一帯の言語を話していたと考えられます。張騫は長安の南隣の漢中の出身、班超は班固の弟ですから長安の北隣の咸陽の出身です。したがってこの二人のどちらが関わっていたとしても「烏弋山離」は長安一帯の言語による音訳であり、「烏」は [a] と発音されていたと考えて矛盾はありません。

吉池：つまり、魚虞模韻を含む魚部は周代に主母音 [a] を持っており、その音は魏晋の頃まで長安一帯では保たれていたという訳ですね。

中村：言葉を換えれば、陝西省の言語が保守的だということです。このことは少し話がずれるかも知れませんが、文字に関しても言えます。戦国時代の秦の文字である大篆やそれを少しだけ改変した始皇帝の時代の小篆は西周以来の字体をかなり保っていますが、同時期の東方地域の文字はかなり革新的で解読に困難をきたすものも少なくありません。

いずれにせよ、模韻字「烏」が/a/にあてられている「烏弋山離」は漢代の長安一帯の言語に基づいたものと考えてよさそうです。残る問題は諸家が魚部に想定している韻尾 [g] の有無ですが……。

吉池：それについては「弋」について議論した後に、歌部（段玉裁の第十七部）の韻尾とも併せて考えることにしましょう。